

第二期 第六十八号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトップ

2022. 03. 20 定有堂書店 発行

権力を取らずに世界を変える

奈良 敏行

ようせい日記

鳥居 貴彦

汽水のほとりから (12)

小原 修治

「原発事故避難計画」を嗤ふ

萩原 俊郎

自動翻訳、機械翻訳をめぐって

松田 裕史

「キマダラルリツバメ」の鳥取における

最初の発見者は私の叔父か？

安藤 隆一

「のさり」のもと「されく」

芝野 浩貴

おあついのがお好き 再び

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その六十七

内田 克彦

八代日記 (二十四)

齊藤 仁昭

先送りの宿題

秦阜 梅林

C会議

森本 龍哉

私たちは言葉にするだけでは足りない

三浦 永理

蛸

あぎの素生

高いところからこんにちは

ドラマリア

権力を取らずに世界を変える

奈良 敏行

(定有堂 店主)

石橋毅史さんの『「本屋」は死なない』を、久しぶりに手にした。二〇一一年刊行の本だから、一〇年の年月が過ぎていく。きつかけは二つあった。ひとつは、石橋さんから送られてきた、「本屋な日々」の最新号が、『権力を取らずに世界を変える』という本の思い出だったからだ。この本は、『「本屋」は死なない』執筆のモチーフだったと、後書きに記してある。もうひとつは、先日会った出版社の二十五歳の青年が、この石橋さんの本を知らなかったからだ。歳月を実感した。

ウナギ丼を、お取り寄せで食したばかりだったので、石橋さんに、「権力を取らずにウナギを食べる」、というのはどうでしょう？ とメールした。気持ちとしては、金銭にゆとりがなくても、エイヤとウナギを食べた快挙を、言

祝ぎたかった。二十歳の頃だろうか、「もっと強く願っていいのだ、わたしたちは 明石の鯛を食べたいと」と、という茨木のり子の詩を耳にした。読まれた昭和三〇年ころのこの詩のメッセージは、「もっと貪婪に」という歯ぎしりだった。わたしの二十歳は、革命を起こしても、願いは鯛を食べることくらい、という願いの小ささの、おかしさだった。すでに敗北していたのだ。

『「本屋」は死なない』を最初に読んだときには気がつかなかった。石橋さんにとつて、「本屋」とは、権力を取らずに世界を変える生き方だった、ということに。序章・一章・終章と、五坪のちいさな本屋についてこだわっている。身の丈から世界を撃つという構成だったのだろうか。

「情熱を捨てられず始める小さな本屋。それが全国に千店できたら、世の中は変わる。」という言葉を拾っている。五坪の本屋の店主の気持ちは、大きな書店で働いていた人だが、そこでは疎外されつづけた。だから小さな本屋千店で、「気持ちをかち合いたい」という望みだった。しかし石橋さんの読みは、「権力を取らずに世界を変える」、その営みの発見だった。著者ホロウエイは、「国家を通じて世界を変える。これが一世紀以上にわたって革命思想を支配してきたパラダイムです」と述べる。石橋さんの気づきは、権力を取るというのは、国家を支配下におくという

ことだが、そんな巨大な合意のもとではなく、千人単位の小さな合意で、ユートピアは築けるという意識の転換だ。「国家の支配をめぐる闘いに代わるものとは、何なのでしようか」とホロウエイは問いかける。「自分がなんであるかについて外から限界を押しつけられるのを拒むこと」と答える。石橋さんは、この抽象的な問いかけを、日本の五坪の本屋のはじまりに見出したのかも知れない。

二十五歳の青年の出版社は、今年「共有地」というキーワードを合い言葉にするそうだ。石橋さんは同じことを十年前から夢見ている。

支配をめぐる闘いに代わるものとは、何なのだろう。「共有地」というのは、コモンという少し雑多な主張になるので、あえて抽象的に抑さえたものだろう。石橋さんは「共有地」という、あるようなないような言葉は使わない。「本屋な日々」と言う。具体的な本屋の人間の生きる日常があるだけだ。連載は九〇回に近づこうとしている。

本屋が仮に身の丈の営みならば、そこには「本」と関わる身の丈の民俗が読み取れる。個別性の強い世界だ。石橋さんの記録は、既存のシステムの中に居場所を見つけられなかった人間の、七転び八起きの話なのだと思う。本屋に向けて「もっと強く願っていいのだ」という励ましなのだ。

本屋の「屋」は営む人の属性のことだ。「本屋」は、

「本」を手立てとした、「やり直しの形式」なのかもしれない。そこには「ピユア」な何事かがつながりつづけている。

2022. 02. 23

石橋毅史 『「本屋」は死なない』 新潮社 2011

石橋毅史 「本屋な日々 第88回 本2009」 共同DM「今月

でた本・来月でる本」発行、トランスビュー編集 2022

ジョン・ホロウエイ 『権力を取らずに世界を変える 増補修訂

版』 大窪一志・四茂野修・訳 同時代社 2021

茨木のり子 「もっと強く」 詩集『対話』 童話屋 2001

太極拳教室（会場 定有堂二階 葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）
毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

よじせい日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

日曜日だったので子どもと出かける。車で何ヶ所か行き
たかった場所をまわった。屋内の施設に入るときは検温を
受ける。体温計の前を通ると正常です、正常です、と音声
が流れる。妻と子が通り僕の番、「体温が異常です」と機
械の声。係の人が寄ってくる。見ると体温計は25.5度と
なっていた。低っ。再度測って無事正常ですと言ってもら
えた。移動中の車の中で電話が鳴る。相手先は保育園となっ
ている。日曜日になぜ? と思いつながら車を路肩に停めて
電話に出る。なんか嫌な予感。「園で陽性の方が出ました
ので、明日から休園になります」と早口に告げられる。あ
あ。電話を切り、次の目的地近くの駅前のロータリーに車
を入れる。妻と、どうしよー、ついにきたなーとうわごと
のように繰り返し、「とりあえず今日はウロウロするんや

めて帰るか」と結論を出す。帰宅後、改めて園に確認。息
子が検査対象であることがわかる。しかし検査対象とはな
んだらう。濃厚接触者はここ二年のうちによく聞く言葉に
なった。だか検査対象とは。ニュースの言葉と現実はいつ
も少しずれている。腑に落ちないままこの日はここまで。
寝る前にふと沖繩に行った時のことを思い出し布団の中
で「木下グループPCRセンター」のHPを開く。予約状況、
空きあり。そのまま大人二人予約。「陽性が確認された場
合は医療機関、または相談センターにご相談を」との同意
書に記名。こここの検査を受けるのは三回目。去年十二月に
沖繩へ行ったとき。飛行機の乗る前と京都に帰った来た日
の二回。どちらもあたりまえのように陰性だった。保健所
や園からの連絡をただ待つよりは早めに自分で検査受けと
いた方がいいか、くらいの気持ち。

翌日は月曜日。園からのメールで調査対象とまた連絡あ
り。夕方近くなって電話も。「明日の二時に駐輪場に来て
ください」とのこと。調査は園の先生がするという。いろ
いろとわからないまま車で昨日予約したPCRセンターへ
向かう。車に子どもだけを残せないので順番に検査センタ
ーへ。会場は以前より少し物々しくなっていた。だが基本
的にやることは同じ。流れ作業で検査キットを提出し終了。

スタッフは若い学生だろうか。ビニールカーテンの向こう側で終始うつむきケータイを触っている。帰宅。

火曜日。結果が出るまで念のため店を休むことにした。二時まで特にやることなし。家の前で古紙回収など出していると近所の同級生がお父さんと一緒に帰ってきた。「検査簡単でしたよ」と二三話す。なんもなければいいね」と手を振って別れる。時間が来たので子をつれて保育園の駐輪場へ。いつもの駐輪場にはテントとブルーシートが張られていた。それまで「じてんしゃ乗るとこに行くん？」「こつちやで」と威勢よく手を引いていた子が急にしがみついていた。ブルーシートの奥から園の先生が顔を出す。が、薄い防護服にマスクとフェイスシールド。子どもはさらに尻込みする。手を引いて中へ。同級生がちょうど検査中だった。少し気が緩んだ様子の子は案内されるがままに奥へ。その後は怖がる様子もなく検査終了。「四日くらいで結果お知らせします」と言われ、同級生とは「また来週ねー」と手を振って別れる。まっすぐ帰宅。子は昼寝。夕方、PCR検査センターのHPを開く。今日十回目くらいちやうか。見慣れたページ。スクロールしていくと「陽性」の文字。え。信じられない、という気持ちはない。やっぱりか。でもまさか。あと、めんどくさ、の感情が一気にく

る。

同意書にあった、「きょうと新型コロナ医療相談センター」に電話。繋がらない。京都市のHPを確認し医療機関一覧を見つける。近所の病院にかけてみる、一軒め、話し中。二軒め、不在。三軒めで電話に出た受付の人に事情をはなす。「陽性なんですね？」と念押しされる。医師が電話を代わった。いきなり「困ります」という。「陽性の人に來てもらうことはできません。こちらもスタッフを守らなありませんので。」「検査だけしてあとは病院へってそんな無責任なことがありますか。あなた抗議したほうがいいよ。」「以前も薬局で検査受けて陽性って人がありましたけど追い返しました。検査したものが責任持って保健所に通知するべきでしょ。こつちもヒマじゃない。」と一気にまくしたてられる。なぜ僕は怒られているのだろう。ほかの病院に電話する気が一気に失せる。夜にオンラインイベントが控えていたので一旦離脱。準備の合間にふとみると妻が電話で話している。繋がったん？と聞くと頷く。相談センターに繋がったらしい。ただ言われることは同じ。「医療機関を受診してください。」「もういいよ。ぐったり。体調、変化なし。

つづく(のか?)

汽水のほとりから (12)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

前々号で『論語』教室の講師をしていることを書いたら、先日知人から参加したいとのメールが来た。その人は私と同じ高校教師で、長年受験指導に尽力されて来た方だが、これまでに『論語』の話など全くしたことがなかったから、この申し出は意外と言えば意外であった。文面によれば、どうやらある程度の年齢となった自身を見つめ直したいということらしく、私は素直に嬉しかったが、同時にまた、わざわざ足を運ばれるのだから良い講義をしなければと身の引き締まる思いがした。そしてあらためて『論語』を学ぶことの意義とは、このような一対一の関係において、相手と如何に向き合うかを考えることであると思われた。

『論語』の冒頭に、「子曰(い)はく、学びて時に之を習ふ、亦(ま)た説(よろこ)ばしからずや。朋(とも)遠方より来たる有り、亦た楽しからずや。人知らずして慍(うら)みず、亦た君子ならずや」という有名な章がある。

が、これを孔子の一方的な主張とみてはならない。注目すべきは、これが会話体であり、その孔子の息遣いを『論語』の撰者が出来るだけ残そうとしている点である。右の言葉も、例えば弟子たちの「一度知ったことを何度もおさらいするのは退屈です」「遠くから来た人をもてなすのは大変です」「相手が自分のことを理解しないのは腹が立つ」といった発言が先にあり、それに対して「そうかね、いや、そうではあるまいよ」と応じた上での発言とみたい。

思うに『論語』を読むことの要諦は、そこにみえる孔子の発言をある文脈で誰かに語られたものとしてみることである。その誰かとは基本的に自分と異なる他者である。だから、その発言はアイロニカル(反語的)で強い言葉にならざるを得ない。そこに『論語』の魅力の秘密がある。『論語』は孔子の他者とのやりとりを記した書物であり、孔子が重んじた「仁」や「礼」も他者と如何に向き合うかという問題を念頭においたものである。「孝」の徳でさえ、孔子においてはそれを家族の外部で見出される他者との関係の在り方として問い直したものだと言える。つまり、孔子の説く「孝」は、家族主義ではなく、親を他者として捉え直し、その関係性をあらためて問うものなのである。

孔子は「仁」について弟子たちに問われ、相手に応じて異なる説明をしている。他者と向き合うとは、そのよう

な孔子の態度をいうのである。その意味では、孔子の思想は、他者に向き合うという形でしか表明されないものだった。それは孔子が書かなかったことと同義である。「仁」とは何かを定義した上で誰に対しても同じような説明すれば、その言葉は一般的他者に対するものとなつてしまい、他者と向き合う言葉とはならない。そこには「理」が生じるが、他者は消えるのである。「理」は学問を生むが、「理」を究めれば、数学や物理学のように、他者どころか人間まで消えるだろう。その意味では、孔子の思想は、学問でさえなく、究極的には他者を愛するという倫理の問題である。

孔子の説いたのは「理」ではない。人としての道である。このことをはつきりと自覚して『論語』を読み進めたのは、江戸時代の伊藤仁斎である。彼が朱子学を批判したのは、それが「理」を体系的に説く学問だったからである。仁斎は先ず徹底して朱子学の「理」を学ぶことから始めたが、後にそれが他者と如何に向き合うかという孔子の思想とは無縁であり、かえってそれを阻害するものと結論するに至つた。その確信を支えたものこそ他者と向き合う孔子の息遣いである。仁斎は自らの学問を古義学と名付けたが、それは本来この息遣いの解明を目指すものであつた。

以上のような知見を、私は柄谷行人の評論「伊藤仁斎論」（『ビューモアとしての唯物論』講談社学術文庫 所収）

から得た。この優れた仁斎論は古く80年代に出ているが、学界からの定評はないようである。一般に江戸思想史は、伊藤仁斎から荻生徂徠、荻生徂徠から本居宣長への歴史的順序と意味づけが自明とみなされている。然るに、柄谷はこの評論の冒頭でこう述べていた。「しかし、私の読んだ印象はまったく違つていた。本論で示すように、仁斎の認識は根本的に徂徠や宣長と異質であつて、後者によつて乗り越えられていくといったものではない。その逆である。」

実際、徂徠の学問は古義学とは似て非なるものである。徂徠にとつて孔子は聖人の一人に過ぎず、『論語』よりも五経を上位に置いた。徂徠には『論語』にみられるような他者と向き合うという倫理の問題はなく、あるのは五経に記されたような社会制度や政治の問題だけである。一方、仁斎は『論語』を読んで孔子という巨大な謎と遭遇した。その意味で、仁斎にとつて孔子は唯一絶対の聖人であり、『論語』は「最上至極宇宙第一の書」だった。『論語』を読むなら、仁斎の注釈書『論語古義』を読むに如くはない。私たちの教室でもまた、これを少しづつ読み進めている。

「原発事故避難計画」を嗤ふ

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

以前、テレビで、米子市内の学校の前の道路が原発事故などで避難する際に狭過ぎるので、拡幅工事を始めた、というニュースが流れた。なんと、のどかな。

原発事故による住民避難計画の話を知った時に、私は戦前、信濃毎日新聞の主筆、桐生悠々(きりゆう・ゆうゆう)が書いた「関東大防空演習を嗤(わら)ふ」という社説を連想してしまう。書かれたのは昭和8(1933)年。長いが引用しよう。

◇ ◇ ◇
桐生は「敵機を関東の空に、帝都の空に、迎え撃つということは、我軍の敗北そのものである」といきなり痛いところを突いた。つまり防空演習をやること自体、すでにわが国は敵に制空権を奪われた「負け状況」を想定したもの

ではないか、というのである。

「敵機の爆弾投下こそは、木造家屋の多い東京市をして、一挙に、焼土たらしめるだろうからである。如何に冷静なれ、沈着なれと言いつても、また平生如何に訓練されていても、まさかの時には恐怖の本能は如何ともすること能わず、逃げ惑う市民の狼狽目に見るが如く、投下された爆弾が火災を起す以外に、各所に火を失し、そこに阿鼻叫喚の一大修羅場を演じ、関東地方大震災当時と同様の惨状を呈するだろうとも想像されるからである。こうした空撃は幾たびも繰り返される可能性がある」

そして昭和20年3月、東京はその通りになった。

◇ ◇ ◇
これが実際に日本が空襲に遭う十年以上も前に書かれたことに驚くが、その根拠が桐生にはあった。

「今日の科学は(中略)幾時間にして、如何なる緯度の上空に達し得るかを精知し得るが故に、ロボットがこれを操縦していても(中略)寧ろ精確に爆弾を投下し得るだろうからである。この場合、徒らに消灯して、却って市民の狼狽を増大するが如きは、滑稽でなくて何であろう」

だから「嗤ふ」のである。では、桐生はどうすればいいと説いたのか。「こうした実戦が、将来決してあってはならないこと、またあらしめてはならないこと(中略)、

従ってかかる架空的なる演習を行っても、実際には、さほど役立たないだろうことを想像するものである」

この社説はあまりに核心を突いていたため、軍部の怒りを買ひ、不買運動の末、桐生は新聞社を追われた。

万一、島根原発で放射能漏れの事故が起きたら、どうなるか。運よく被爆対策のヨウ素剤を飲みながら東へ、南へと避難できたとしても。だが、福島県浪江町のように、放射能で汚染された地域には戻ることはいかない。それが津波や地震、台風などの災害と違うところだ。復興どころか、

町が長くゴースタウンと化す可能性もある。

いや、その前にはたして避難などできるのか。

もう皆さんは忘れたかも知れないが、有事の際の国民保護計画が策定されていた2005年、当時の片山善博知事が「敵に侵攻されても2万6千人の住民避難に十一日間かかる。世離れた結果だ」と避難の難しさを指摘した。国民保護計画は自衛隊の反撃を受けながら進んでくる武装勢力が相手だが、原発事故は風によってどこにでも自在に流れる「見えない敵」を相手にしなければならぬ。

片山知事が嘆いたように、県内は大量輸送するバスも列車も決定的に不足している。片側一車線の県境の峠道は自家用車で大渋滞となり、そこに放射能はやって来る。

つまり、防空演習をせざるを得ない戦況と同様、われわれは避難しなければならなくなった時点で、実はもう「アウト」なのである。だから原発事故は「将来決してあってはならないこと、またあらしめてはならないこと」。私の言いたいことは桐生と全く同じだ。

東日本震災の原発事故から十年余。高い代償を払った日本は、一時全面停止した原発を期間を定めて少しずつ再生エネルギーに転換し、減らしていく努力をすべきだったが、怠ってきた。それどころか、住民投票を求める市民の声を、あるうことか地元の首長や議会が「国が判断すべきこと」とことごとく退けた。自ら、地方自治や住民自治はもう要りません、と言っているようなものだ。

幸運にも事故なく稼働が続いたとしても、行き場のない危険な「使用済み核燃料」は増え続け、われわれの子供や孫に先送りされる。これのどろろSDGs（持続可能な社会）なのか。「わが亡き後に洪水は来たれ」。いくら経済でギリ貧になろうと、そんな言葉を口にする国民にだけになって欲しくない。

自動翻訳、機械翻訳をめぐる

松田 裕史

(高校教員)

「AIによる自動翻訳の精度向上が目覚ましい。」という日本語をグーグルの無料翻訳はミスなく英語に翻訳する。自動翻訳もここ五年くらいで様々な種類のものが登場し一つの市場を形成している。DeepLの有料版であればもはや人間による翻訳業が成り立たないのではないかと思わせるくらいの精度と速度を誇る。よく目にするところがある自動翻訳の広告にはTOEIC九六〇点以上の英語力と書いてあるから、ほとんどの英語教師より英語力が上だということになる。チェスの世界チャンピオンであるガルリ・カスパロフが一九九七年にAIに負けて以来、囲碁・将棋でもAIは人間を凌駕するようになった(ただし、藤井聡太は時にAIを超える一手を繰り出すことがあるが、大局観はAIより人間の方が上だと言っているインタビューを見たことがある)。語学でも人間はいつの間にかAIの後塵を拝するようになったのである。いわゆる翻訳学と呼

ばれる研究分野でも自動翻訳、機械翻訳は大きなテーマとなっている。

『自動翻訳大全』という本はその名の通り自動翻訳についての概観から具体的な利用法まで詳述されている。どんなジャンルの言葉でも即座にほぼミスなく翻訳可能かと言えばそうではないらしい。しかし、日本語の原文に次のような手を加えればかなり正確に英語の翻訳が一瞬にして出上来る。例えば、「文章は短く、シンプルにする。一文が長い場合は二文に分ける。一文に述語が二つになるまで短くする。理想は一つ。」「主語「誰が」は省略せず、ハッキリ書く」「所有格「誰の」や時間情報「いつ」を明確にする」「日本語特有の比喻、慣用句、オノマトペは使わない。別の表現に置き換える」である。これらがすべてではないが、コアの部分はこれで事足りる。

理系の研究者は世界に自分の論文を流通させるために英語で論文を作成しなければいけないが、今や多くの研究者が有料版のDeepLを使っているらしい。日本語で書いてそれをDeepLで英語に翻訳。もしかしたら、文法・語法ミスがあるかもしれない。そんな場合はGrammarlyを使えばミスを発見して修正案を出してくれる。自分で英語で書いていれば多大な時間がかかっていたのが、AIを駆使することで大幅に時間短縮をすることができる。

自分の書いた日本語を自動翻訳用に仕立て上げるために、一文を短くしたり、述語の数や主語や所有格を気にしたり、比喩、慣用句、オノマトペを別の日本語で言い換えてみる。実際にやってみれば分かるが途端に自分の言葉ではなくなる感覚に襲われる。今後、より速く自動翻訳による英語を手に入れようとして、初めから自動翻訳向きの日本語を書く人たちが増えるだろう。そこでは文体という身体（感覚）は失われる。内容さえ伝われば良しと割り切り、複製可能な言葉がアカデミックな世界でも溢れかえることも予想される。理系、文系、それぞれの世界で事情は違うだろうが、殊、文系の世界では諸刃の剣になりかねない。

京大の柳瀬教授はさらなる大局観で機械翻訳を見つめる。曰く、「機械翻訳の進展と普及により、異言語間の情報伝達が促進されても、それが文化の多様性・複数性の否定につながるのには危険」。また、英語で話したり書いたりする際、英語母語話者の思考法をなぞりながら表現することとは学校教育でも奨励されている。日本語の思考で英語を表現してはいけなないと。僕もそのように指導している。ところが、それに対しても柳瀬教授は疑義を呈する。要約すれば次のようになる。

英語での表現において、「主張提示・主張立証・主張再提

示」の認識・表現法がデフォルトである。だが、そのよ
うな認識・表現法は科学やビジネスには有効でも、単純
命題の肯定・否定に還元できない複合的な問題には不適切
かもしれない。よって、その認識・表現法の限界を示した
上で充実されるべきであり、大学教育はそれ以外の認識・
表現法の啓発にも力を注ぐべきである。複合的な世界にお
いて文化の多様性・複数性は堅持されなければならない。

異言語が開く豊饒な世界と異言語がその使い手が気づかぬ
ままに強いるもの。そして、自動翻訳が言語という身体も
たらず影響。AIを活用する／しないという行為の背景に
ある問題にも思いを馳せたい。ちなみに、「AIによる
自動翻訳の精度向上が目覚ましい。」という日本語をグー
グルの無料翻訳はミスなく英語に翻訳する。」という日本
語を自動翻訳は正確に英語にできない。Grammarlyに頼
れば修正していただけるが、原文と意味がずれてくる。そ
して、Grammarlyがなぜそこを修正したのかを理解する
ことは今のところ、人がするしかない。

（参考文献）

坂西優、山田優(2020). 『自動翻訳大全』三才ブックス

「キマダラルリツバメ」の鳥取における

最初の発見者は私の叔父か？

安藤 隆一

(江崎町の隠居)

1 はじめに

その生息地が天然記念物である蝶のキマダラルリツバメ。その天然記念物の指定地域は、鳥取市東町一〇番、一〇番ノ一、同栗谷町一〇番、自一〇番ノ一至二〇番ノ一四、一〇番ノ五、同上町八番、八五番八五番ノ第一八五番ノ第二合併招魂社境内八三番である。この地域は、私が生まれ、住む江崎町の近隣の場所である。小学生のころから、学校でこの蝶のことを習い、親しみを感じている。そして、キマダラルリツバメは、鳥取の誇りだと思っている。

最近自宅の片づけをしていたら古い一枚のコピーが出てきた。『昆虫と自然 13(6)』(1978年)という昆虫の専門誌の26ページで、亡き私の叔父の岡田一次・玉

川大学農学部昆虫学教授(当時)の「虫の本と私(2)」というタイトルの文書である。

2 鳥取における最初の発見者と信じていた叔父

その内容を要約すると次のとおりである。大正14年、当時、叔父は鳥取一中の4年生で、鳥取市郊外の公園で3匹のシジミチョウを採取した。その名前は誰に聞いても分からないので、博物教室の谷浦先生に蝶の図鑑を見せてもらったところ、キマダラルリツバメの図が載っており、「此は本邦稀なる種類にして今迄岐阜播磨地方に発見せられたるのみ」と、記されており、「この時の私の感激は大きなもので、この出会いが一生を運命づけた」としている。さらに続けて「その後、日本でただ一つの昆虫専門雑誌である『昆虫世界』のあることを知り一匹を送ってみた。第29巻339号11月号35ページに次のような記事が載っている『*Aphnaeus Takanonis Mats.* の新産地 鳥取中学校の岡田一次君により本年七月十某日より二十日にかけて同市権現山にて三頭のキマダラルリツバメを採取された。余に一頭恵送され該種なる事を決定したから茲に新産地として記録して置く。因みに本種は低個性にして飛翔余り活発でないといふ(柳原記)』」とある。

このページの最後には、「此は本邦稀なる種類にして今迄岐阜播磨地方に発見せられたるのみ」の出典である松村松年札幌農学校教授『日本千蟲圖解卷之四』（1907年）の關係部局が記されている。そして、「この蝶の記事や写真を見る度毎に私は恩師松村松年先生の名著・日本千蟲圖解卷之四を思い出す」とあり、叔父は鳥取一中を卒業後、松村松年先生が在職されている北海道大学へ進学するのである。

3 「箕浦忠愛、河越重虎が採取したのもが、松村博士に送られ学会発表」とされているが、大きな矛盾が……

叔父の文章には、こういう一節も登場する。「風の便りでこのキマダラルリツバメが鳥取市付近での天然記念物に指定されたことを聞いた。最近になってどんないきさつがあったかと思つて鳥取の知人（注、筆者のこと）に調べて貰つたところ、昭和51年11月1日発行『久松山の史跡と自然』の比に次のような一節がある。『生駒義博氏の調べによれば、鳥取では、箕浦忠愛、河越重虎（岸本と改姓）が明治37年（1904）に樗谿で雄を採集したのが嚆矢となりやがて両氏の手で完全な雌雄の標本（雌の採集は初記録）がそろえられた。これが蝶採集家の高野鷹蔵氏の手を経て、

北海道大学松村松年博士に送られ、明治39年（1906）に *Aphnuenus Takanonis Matsumura* の学名で学会へ発表された。（略）』」

学会へ発表された翌年の明治40年発行の松村博士の『日本千蟲図解卷之四』には、『此は本邦稀なる種類にして今迄岐阜播磨地方に発見せられたるのみ』とあり、鳥取のキマダラルリツバメが松村博士に送られたのなら、この記述と矛盾する。

『日本千蟲図解卷之四』発刊の際の記載ミスかもしれないと、学会発表の論文を鳥取県立図書館で取り寄せてもらった。この論文は「*Neue Rhopaloceren Japans.*」という題名でドイツ語で書かれていた。鳥取市役所の国際交流員の方に訳してもらうと、「発見地・播磨 私の収集の1点です。高野さんにより送つてもらいました。」となる。この記述だと、明らかに、鳥取で採取されたものが松村博士に送られたのではないということになる。

4 必ず原典に当たり孫引きは避けるべし

1978年の叔父の問い合わせに、『久松山の史跡と自然』を紹介して終わりとしていた。この時点で、叔父が鳥取における最初の発見者ではないことが明らかとなったからで

ある。叔父の書いたこの文章のコピーも埃を被ったままだった。「鳥取で採取されたものが松村博士に送られたのではない」なら、真実はどうなのか？なぜこんな間違いが起こったか？少し、調べてみることにした。

生駒義博の記述の出典である鳥取県教育委員会社会教育課『鳥取県文化財調査報告書第2・3集』（昭和37年5月）には、確かに『久松山の史跡と自然』と同じ内容の記述がなされている。

しかし、生駒は、昭和14年の『鳥取県史跡名勝天然記念物調査報告書』において、「札幌の松村松年博士の日本昆虫大図鑑（昭和六年、刀江書院発行）にはキマダラルリツバメにつき左の如く記せり。（中略）これは始めて鳥取にて高野鷹蔵氏の発見せるものなるが稀なりとあり（中略）キマダラルリツバメの発見者は高野氏にあらざして岐阜の名和梅吉なり」としている。さらに、松村博士が学会に発表した蝶は播磨の国にて、福田卓が採取したものが高野の手を経て松村博士に届いたものとしている。こちらの方が筋が通っている。さらに、「これは始めて鳥取にて高野鷹蔵氏の発見せるものなるが稀なりとあるのは何かの間違いならん」、としている。

松村博士の名誉のため、日本昆虫大図鑑に当たってみた。この本は、国立国会図書館の電子データで見ることが出来る。

る。547ページに蝶の写真が載り、この文章があった。と同時に他の蝶の説明も目に入った。「これは、○○地方にて○○氏の採集せるものなり。」とあった。つまり、「これは」というのは、蝶一般ではなく、掲載されている「蝶の写真」のことを言っているのである。つまり、「キマダラルリツバメが鳥取で始めて発見された」ということではなく、「この写真に写っている蝶」は「始めて鳥取にて高野鷹蔵氏の発見せるもの」という説明なら、間違いではない。こう考えれば、松村博士の名誉は回復される。

5 一つの感動から、偉大な昆虫学者が誕生

私は採集した、私が発見したといっても、第3者が確認証明しなければ、意味がない。つまり、学芸会や専門誌への発表が必要である。その意味では、松村博士が明治39年に学名を付け日本動物学彙報第六巻に掲載したのが、最初ということになる。この情報が現在と違って、大変である。今回、鳥取県立図書館にお世話になってこの小論に登場する書籍を現物、電子データともに検索いただいた。

叔父が大正14年にキマダラルリツバメを採取したとき、先生に頼んでやっと1冊の蝶の図鑑を見せてもらったという。その本には、産地として鳥取はなかった。しかし、

明治40年に発行された高野鷹蔵編『日本産蝶目録』には、その最初の部分に「きまだらるりつまめ」鳥取産として写真が掲載されているので、この本を読むことが出来たら、自分が鳥取で最初ではないことを知るであろう。

また、その蝶を送られた雑誌『昆虫世界』の担当者も、現在なら容易に真実を確認出来たはずであるが、当時としては情報の収集がなかなか困難と思われた。

しかし、叔父は、「自分が初めて、キマダラルリツバメを鳥取で発見した」という感動から、昆虫学者を目指し、人生において昆虫学者として数々の偉業を上げたというのは、なんとも運命の悪戯ということなのであるうか。

「のさる」のまじ「われく」

く人から人へ流れるく

芝野 浩貴

(地球探検家)

5年前、日本文学全集刊行記念イベントに参加した。編集者の池澤夏樹のもと、それぞれ古典の訳者を担った古川日出男(平家物語)、高橋源一郎(方丈記)、内田樹(徒然草)(5号)、酒井順子(枕草子)のトークを楽しんだ。作品の選定を行った池澤夏樹は「苦海浄土」を日本文学からは外せないと強調していた。(渡辺京一が石牟礼道子の私小説だと言った意味は深い)「みっちんの声」や「されく魂」などを記し、石牟礼道子を評する時に、池澤氏が「のさり」という言葉を使うのを読んでいたので、熊本の言葉であることは知っていたが、天草の方言であることを知ったのは最近である。(60号)小笠原で海亀の世話をしていた知人Aさん(66号)が次に行きたい島は「のさりの島」だとい

う。映画のさりの島(原知佐子さんの遺作)では、「嘘」について、考えさせられる。真実だけを正義として主張すればいいのか。音楽は谷川俊太郎の息子である谷川賢作担当である。谷川親子の共演を「ススムライン」によりこぶし館で目の当たりにした。定有堂で『詩と死を結ぶもの』徳永進医師と谷川俊太郎の往復書簡を購入したというAさんからは、「じべた目線」を学ぶ。ともすれば理念で突き進んでいきがちな私を生活世界に引き戻してくれる人を紹介してもらっている。(本稿では、〇〇さんが仲介役となり知りえた時に〇〇ラインと記載している。谷川親子演奏朗読は徳永進さんの企画だったので、ススムライン)「Aライン」から通じた人としては、「ケアを開くシリーズ」の著者が多く、編集者の白石正明、坂口恭平、斎藤陽道、東畑開人、伊藤亜紗、若松英輔などが挙げられる。今是有名な人ばかりだが、Aライン開通はここ2、3年の話ではない。坂口恭平や斎藤陽道といえ、彼らと個人的に交流のある汽水空港のモリテツヤ店主の関係者からも学ばせてもらっている。文化人類学者の奥野克己はインゴルドの「人類学について、人々について何か語るのではなく、人々と共に学ぶ学問だとして、記録を持ち帰るマリノフスキを敬遠する。人間の生そのものと会話することである。科学の傲慢な態度にも、何もしない人文学にも距離を置く。自

然と文化を答えとしてでなく、問いとして捉える」の部分を出して自著に書かれているが、全く同感で私もよく引用する。石牟礼道子としても、「ただ声を聞いているのではない」という大宅壮一ノンフィクション賞の受賞辞退ではなかったか。奥野氏が引用される国内の著者は『人類堆肥化計画』の東千芽で、東さんの存在を知ったのも「モリライン」である。谷川親子の演奏にしても、汽水空港イベントでの「坂口恭平、東千芽、岡啓輔……」などの数々の企画に同席していたのは小原文化センター長(音信不通寄稿者)である。小原氏と周防大島で寺尾紗穂のコンサートを聴いた日に、Aさんは福岡の「とらきつね」で同じコンサートを聴いていた。(寺尾さんはこの日、2箇所でコンサート、新刊『天使日記』を読みたい)それ以来、Aさんと紗穂さんは交流している。私は大型書店に情報収集で立ち寄るが、個人の本屋さんには店主に会いに行く。しかし、無職・無名・名刺なしの私が急に話しかけてもただの不審者なので、本屋関係では、〈奈良クレジット(定有堂)や〈モリクレジット(汽水空港)〉を利用している。福岡ブックスキューブリックの大井実店主や往来堂など(奈良クレジット)が通じる本屋さんは多いので助かっている。小原氏と海文堂書店(2013年廃業)に寄った後に参加した故橋本武講演会企画に関与していた岩波書店のスタッフに声

かけられたのも岩波文化ホール閉館は誠に残念)、京都本屋巡りで待賢ブックスセンター店主の鳥居貴彦さんと話せたのも(奈良クレジット)。熊本長崎書店で斎藤仁昭さんと初対面で打ち解けたのも(奈良クレジット)があつてこそ。その時、斎藤さんに聞いて橙書店の場所は確認していたのだが、敷居が高くて熊本に寄るたびにアクセスしても店の前までしか行けなかった。「ブックスキューブリック・はこほ・汽水空港」の共通点が「アルテリ」だったことを思い出し、コロナ禍だからこそ1月下旬、勇気を持つて田尻久子さんを訪ねた。坂口恭平が常に信頼する田尻さん。(谷川俊太郎と黒田征太郎さんの絵本『じべた』の編集もされている)店内には盛山麻菜美さん企画の青森りんごが置いてあつた。渡辺京一さんや伊藤比呂美さん以外に最近橙書店に立ち寄る文筆家を訪ねると斎藤陽道さん(昨年一家4名で熊本へ移住)の名前が挙げられた。橙書店を出た後、鳥取市勤務で奈良さんともよくお話ししているSさん(5号)から勧められた高橋源一郎ラジオを聴いた。対談相手は伊藤比呂美さんだった。久子さんと比呂美さんは、昭和40年代の石牟礼道子の日記でよく盛り上がるという話も伺った。「365日の中で休めるのは2, 3日なので大変です」と言いながらも人生を謳歌されていると感じた。今年の共通テスト国語には藤原辰史の文が出題された。縁

食論が私と横田泉さん(61号)を繋ぐ本となったのだが、横田さんは「自分が精神科の病気になったらかかりたい精神科医」に坂口恭平さんをノミネートされた。(メデイカルトリビュン企画)精神科医でない人を推薦する横田さんと引き受ける恭平さんに「されく魂」をみる。

AさんやSさんなど、私の関係者とも文通していただいている横田泉さんは、『いのちの手紙』(坂口恭平・斉藤環共著)を実践される稀有な人である。拙著(65号)をわざわざAmazonでなく、本屋さんまで足を運んで購入された。

「手ぶらの思想」だ。今度くじらブックス(定有堂を訪問された)があり、奈良クレジットが使える)にも寄ってみよう。

「恨み返すなぞ、のさりち思えぞ」

おあついのが大好き 再び

ムラカミヒロミ

(ライティング・ブックマン)

近頃は、文庫も厚冊が増えてきましたね。年配者向けに、ポイントが大きくなって、勢いページ数も増えた、ということでしょうか。

かつては、厚い文庫なんて、石坂洋次郎の『光る海』(六四〇頁)、石原慎太郎の『青年の樹』(五三〇頁)、カフカの『城』(五一九頁)くらいだったのですが。

現代教養文庫に「小栗虫太郎傑作選」と「夢野久作傑作選」が入って驚いたのも、今は昔、四十年前も前の話である。レーベルどころか、版元自体、消滅してしまった。

虫太郎の『黒死館殺人事件』が五四七頁

久作の『ドグラ・マグラ』は六七〇頁

『黒死館』の新潮社オリジナルは、四四六頁。『ドグラ』の松柏館書店オリジナルが七三九頁。単行本としては、好

ましい厚さだが、この文庫版は凄かった。その後出た他社版は二〜三分冊だったのだから、常識外れ加減がお分かりいただけよう。活字がみっちり詰まった版面は黒々として、晦渋晦冥な内容と相俟って、一気に読む気を喪失させる迫力に満ち満ちていた。(それかあらぬか、両巻とも講談社文庫版2分冊で読むことになった)

思うに、両傑作選とも五巻編成。一巻を分冊にすると如何にもバランスが悪い、という配慮があったのかもしれない。

近年の全集ものは軒並み厚い。

『日本探偵小説全集』各巻平均八百頁前後

『江戸川乱歩賞全集』六〜七百頁 十一巻は九四四頁

『中井英夫全集』創元ライブラリー 八巻は八六二頁

『江戸川乱歩全集』光文社 最終巻三十巻は九五五頁

『土屋隆夫推理小説集成』五巻は八七八頁

『中村雅楽探偵全集』各巻平均六五十頁

『伝奇ノ匣』五〜六百頁平均

殆どミステリですな。まあ、純文学作品や作家では、全集にはなりにくいだろう。

厚くなるのは、長篇二本分を優に詰め込んでいるからで、理の当然なのではあるけれども。

単発ものだと、

コリンズ『月長石』創元推理文庫 七七九頁

ハインライン『異星の客』同 七八一頁

京極夏彦『狂骨の夢』講談社文庫 九八二頁

松本常男『ビートルズ海賊盤事典』同 八五九頁

竹本健治『匣の中の失楽』同 八二九頁

中井英夫『虚無への供物』同 一冊本の最後の版（一九九四）六六九頁

『文語訳 新約聖書』岩波文庫 七八六頁

リラダン『未来のイヴ』光文社古典新訳文庫 八二七頁

マキャベリ『デイスコルシ』ちくま学芸文庫 七五二頁

など。学術文庫や学芸文庫の辞典ものは除いた。厚いのが当たり前だし、用紙も辞書用の薄いものを使っていて、見た目以上に頁数がある。

流石に千頁クラスはないだろう、と思っていたら、ありましたよ。

池田知久『莊子 全注釈（上・下）』学術文庫

共に一一〇〇頁超、

『東京創元社文庫解説総目録』（本冊）一一五〇頁

ぶっ魂消た。

そうは言っても、やはり、七〇八百頁くらいが限界だろう。ソフトカバーは、読了後、束の厚みが増す。頁をパラパラさせて、空気を入れるだけで増える。当然、背側は接着剤で固められているから、腹側だけが広がる。そうすると、背が反る。英米の安物のPBが見るも哀れな状態になるのを御覧になった方もあろう。わが方の文庫は、あそこまで粗雑なつくりではないが、それでも接着剤は経年劣化するとノドが割れ、厚くなる程、リスクが高くなる。

重量も無視できない。片手に持つて読めない文庫というのは、そもそも文庫としてのレーゾン・デートルを問われているように思えるのだが。

とは言うものの、分厚い文庫、うっとりするよねえ。

鳥取あれこれ その六十七

内田 克彦

(地域研究家)

(承前)

ところで、「信長上洛に就き、在京有るべき衆中事」と題する文書があり、それには各方面が列挙され、「この外その寄々の衆として触れ申すべき事。」として、次に書き出した「触状案文」を添えている。この方面の中に、毛利の名はなく、「山名殿父子」のほか、最後の方に「因州武田名代」と出て来る。

禁中御修理・武家御用その外天下いよいよ静謐のため、来たる中旬、参洛すべく候條、各上洛有り御申し上げられ馳走肝要に候。御延引有るべからず候。恐々謹言。

〔元龜元年正月〕 廿〇日

信長

一五七〇(元龜元)年といえば、信長が足利義昭とは決定的対立に及んでいない時期である。毛利の支援を得て鳥取城主として地歩を固めつつあった武田高信であったが、信長が関与する文書に、「毛利」はなく、「因州武田名代」

が出て来るのを、どう解釈すればよいだろうか。

しかしながら、一五七三(天正元)年に、因幡での大きな動きが、高信の身に降りかかってくる。

誠鳥執之儀、此方加勢遅々付而、一着不能是非候、御方之儀、彼表御氣遣御心勞之処、彼〔武田〕家中衆別心之故、不被相叶候段尤候、無何事御下、先以可然候

〔天正元年〕 九月廿七日

〔吉川〕 元春

久芳因幡守殿

即ち、山中鹿助率いる第二次尼子家再興軍と組んだ山名豊国に攻められ、武田家中衆の別心により鳥取城が落城してしまうのである。初代鳥取城主の武田高信にとって、苦難の一〇年であった。

さて、『鳥府志』には、次の記述がある(『鳥取県史 第6巻近世資料』)

〔高信は〕斯て其後国中の城々、強きへは音信を通じて味方へ引入、弱きは其領地を掠めける程に、布施より安からぬ事に思ひて、鳥取へ討手を差向られけるに、却て敗軍して、その威焰当る可からず。是ぞ鳥取の地、

城邑と相成たるの始なり。

また、一五六五（永祿八）年に、高信の家老とされる西郷因幡守が「吉方之内町屋田」を買っている文書（『鳥取県史 第2巻中世』）も残っている。

つまりは、鳥取の地が城下町として始まったのは、初代鳥取城主の武田高信の時代からであると言えよう。

それでは、当時の鳥取城の山下はどうであったか。涌島義博著『鳥取市民百年史』（一九五三年刊）の「大水害の前後」の項に、文献から引用しての記述があり、ここではその引用文献を直接参照して掲げることにした。

まず、『太閤記 卷第二』（小瀬甫庵）の「因幡国取鳥（ママ）城落城之事」である（『新日本古典文学大系60』）。

此城と申は、高山峨々と独立し、西北は滄海漫漫として、不可探（はかるべからず）。山下に湊川を帯にし、其便尤よし。因之容易攻干べきやうも無りけり。

さらに、『雪窓夜話』（上野忠親）である。長くはなるが、引用する（『因伯叢書（第三冊）』）。

或人往古は今の國府宮の下村の村外れ札幌の邊より

横に切れて。山手の方へ付て國府川流れたりと云なり是より岩倉村卯垣村に流れ来る。卯垣村には大いなる溜あり。今其所は田に成て其田の名を大窪と云へり。夫より下に流れ通りて今竹嶋の前を過りて。今の町外れ立川新町の通り筋は國府川の末にて。吉方の観音の前を今の寺島の屋敷迄大なる河にて。此所よりさきには大なる湖水を湛えたり。底深く蘆葦茂れり。此湖水より下へ流れ出たる川筋は。今の古大工町にある總堀是なり。是より若櫻町の總門の外へ流れて下へ出る川を湊川と云けり。内丹後町の今の堀筋を通りて出合橋にて袋川と一つに落合て。加路の湊に出たりと。

『新修鳥取市史 第一巻』の「水害と環境」の項に、次の記述がある。

鳥取がしばしば水害受難の都市となった要因は、軍事的目的を主眼として鳥取城が築城され、鳥取市がその山下に城下町として立地したことによる。

城下町としては、非常に水害に遭いやすい、立地条件上ふさわしくないところから鳥取の町づくりが始まったのである。（この項、了） 二〇二二：二：一六

八代日記 (二十四)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

二月某日

ルート配送の途中に道の駅に寄って昼食をとる。味噌汁がやたらとうまい。発酵食品不足なのか。とったあとに売店に向かい野菜やお惣菜を眺めていてつくづく思う。ほんとに自分は営業職とか向いてない、知らない人と話すのはつかれる、野菜を手にとりながら鉄分足りてないかもだからほうれん草買わなきゃとか家族にどんなごはんを作ってあげようかと考えているときがいちばん精神が充実して落ち着く、ああ主夫になりたいと。

二月某日

福音館の「たくさんのふしぎ傑作集」の目録をみていたらどれもこれも面白そうでこどもに読ませたいというよりも自分が読んでみたい。「しめかざり」、「本のれきし2000年」、「ゾウの時間とネズミの時間」、「鬼が出た」、「春をさがして」など。今度注文しに行こう。

二月某日

またもさいきん本屋に立ち寄っていないなと思いとりあえず最寄りのツタヤへ行ってみたが棚をみてもまったく情報が入ってこない。こりやいかん。が、これが中年サラリーマンの一般的な感覚なのかもしれない。嗅覚落ちてます。それともどれも必要としないものだというだけだったのか。

必要といえは入江亜季『北北西に曇と往け』の六巻はいつ出るのだろうか。前巻が出てから一年以上経過している。早く読みたい読みたい読みたい。そして頭に入っていないといいつつダンチュウのバックナンバーが割り引いて売られていたのは発見。二冊買う。雑誌のバックナンバーの値引きは他にも増えているのだろうか。

二月某日

ソロー曰く「人の豊かさは気にしないでいられるものの数に比例する」。おっしゃる通り。気にしないではいられないことが多すぎる。気になるものをとれだけ手離せるか。

二月某日

シンコーミュージック『至宝のジャズ・ドラマを聴け！』

問答無用の名演ディスク・ガイド2001』を購入。音楽を系統だてて聴いてこなかったのでジャズドラマを軸に勉強してみたら軸にできるのではなからうかという甘い目論み。しかし表紙にあまりやる気が感じられない…。



君はサツチモの声で俺を呼んだり

量子論の本の話を喋り出す

薄い灯りの中へ潜り込み

唇気楼で編んだ景色を見てる

プルシエンコのような華麗なステップで
いつもの様に
ヤグデインの様なスピンをひねったり
あの日の様に

君はパンとジャムとチャイを口へ投げ込み

電子音の様に小さく喋り出す

長い話もちちへはぐれ

乱気流に乗ってどこかへ消える

プルシエンコのような華麗なステップで
いつもの様に

ヤグデインの様なスピンをひねったり
あの日の様に

こんな夜はお前らと
ただ

踊りたいぜいつまでも
ただ

君は陰と陽のパズルを横目に

揚子江の様な気分で眠る

下手な勘ぐりとアイロニーを置き去り

スモークな空を静かに見てる

赤い点と線の隙間にとびこみ

サブマリンに乗って深くへ潜る

粋な旅路と旅路の間には

半ズボンの頃のテンポで踊る

プルシエンコのような華麗なステップで
いつもの様に
ヤグデインの様なスピンをひねったり
あの日の様に

こんな夜はお前らと
ただ

踊りたいぜいつまでも
ただ

(ケバブジョンソン「揚子江」作詞：杉浦真寛)

先送りの宿題

秦阜 梅林

(楽人)

「展覧会の絵」に就ひては、p. 版、ラヴェルに拠るオーケストレーション版共に幾度か採り上げ書ひて来た：

初めて聴ひた学童時代、僕が最も惹かれた題名が堂々と曲尾を飾る「キエフの大門」だった。壮麗な音楽の広がりと共に：

キエフは町の名前、ウクライナの首都。(往時)ソ連邦内の：あんまり良くわからなかった：

大門は「どんな門なの？」「うーん、きつとパリの凱旋門みたひな？」訊ねた大人たちは一様にさう応へ、今のやうに直ぐグーグル検索でもなかったのでやがて疑問許り膨んで行った：

僕は？と云ふと、大きな門と云へば仁王様の屹立するやうな木造の其れしか想ひ浮かばなかったものだから疑問は常に据へ置きになるのだった。

I

学生時代、留学先のヴィーンからあちこちに旅するやうになった：中世以降、欧州、城塞都市の大抵は小さな門、或ひはもつと旧ひローマ時代の豪華な凱旋門跡も見た、中でもリミニの其れは立派なもので心に残った、そして思つた「ああさう云へば宿題は未だだったなあ」と。

後年「ロシアの有名な」作曲家や演奏家、舞踏家そして作家等がキエフ出身と聞くと、ああ此の人も、大門をくぐった口かあ。ゴーゴリをはじめ予想以上にその数は多く質の高さに目を見張った。我が国で云ふと、きつと在京の有名作家に東北、或ひは九州、四国出身者の多ひやうなものだらう。どの人も「東京の文豪」：然し地元銅像が立つて居たり：する訳だ。そして外国人に東北弁と東京言葉の区別がつかないやうに僕らにはロシア語とウクライナ語の区別さへつかない。

今、直接見へるウクライナの顔と云へば？僕には、現在キエフ在住の誰某と云ふよりは外国で暮し、汎ひ意味のロシア人、スラヴ人として活躍中の人達の顔である。

II

思はぬ流れの中で、最近キエフの大門付近をデモする民衆の姿などを度々目にするやうになった、まざまざと。現在の切迫するウクライナ情勢下必死の抵抗である。

こんな形で積年の解答が氷解、目の前に広がってこやうとは！…

III

此処で僕は、国際政治を語るつもりもその資格や知識も無い。唯、進攻しやうと云ふ国、させまひとする国や勢力の中、本心からさせまひと奔走尽力する者と、よそさまの火事現場に遭って「これは美味しひ」と何らかの利益や商売、主導権争ひにありつかうと浅ましひ駆け引きを画策する陣営、ギラギラした欲望を尤もらしひ人道主義やら美辞麗句で飾りたてオブラートに包んで忍び寄って来る輩…さういった様々な動きの複雑に交錯する中、翻弄され、血を流し理不尽な暴力の犠牲になるのはいつの時代にあつても、地域に暮し棲まふ当事者、哀れな民衆である。

IV

トルストイが「戦争と平和」に訴へた問題の本質。まさに此処こそが問はれ続けてゐる。此れからは其れこそを終生の宿題としやう、キエフの大門は今、揺れてゐる…。

2022. 02. 14

「今回の一冊」

L. トルストイ「戦争と平和」北御門二郎訳

「今回の一枚」

M. ムソルグスキー「展覧会の絵」(M. ラヴェルによる管弦楽版)

○K. アンチエル指揮チェコフィルハーモニー

○V. フェドセイエフ指揮モスクワ放送交響楽団

○E. アンセルメ指揮スウイス・ロマンンド管弦楽団(rec. 1960)

○E. オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団

○N. ゴロヴァーノフ指揮 (rec. ca1950)



(イラスト・秦阜 梅林)

C会議

森本 龍哉

(鳥取大学地域学部4回生)

教室の壁の一部は時間割を書き記しておくために黒板になつていたが、それとはべつに持ち運び可能な縦長の黒板も教室にあった。店頭看板のようなそれには、その日の時間割がチョークで書かれて縦に並んでいて、それぞれの授業が終わるたびにその授業名の右隣にS、A、B、Cのいずれかが生徒の手によって追記された。それは、その授業を受けたその時間の生徒たちに対する教師からの評価だった。Sが1番良く、Cが1番悪い。S、A、Bの評価では特別なことは何も起きないが、縦長のその黒板に白色のチョークによつてCの文字が書かれるとき、教室の生徒たちは落胆の声をあげた。この時点で、その日の終わりに「C会議」が開かれることが決定したからだ。

終学活の時間になり、いつものようにその日の授業評価を各班が報告していく。教科ごとに担当班が決まつていて、その担当の生徒が授業が終わるたびに担当の教師からその時間の評価を聞き、くだんの黒板にAやらBやらをチョークで書く。そしてこの終学活のときになって、その評価の理由を教室にいる学級担任や生徒たちと共有することになる。A評価以上であった場合には、良かった理由が並び、改善点はほとんどない。一方でB評価以下の場合には、良かった点はなく、改善点として「集中力の欠如」や「忘れもの」などがよく指摘された。自分たちの実感として、そうだろうな、という評価のときもあれば、まるでその実感もなくSがついたりCになつたりすることもあった。評価が高ければべつに何もないのだが、Cがつくと終学活のなかでC会議をやらなければならず、その意味で生徒たちはこの1教科ごとの評価に少なくとも関心を持つていた。

C会議の時間になり、班ごとに「どうすればCを防ぐことができたか、できるか」を話し合う。それぞれの班は4、5人で構成されていて、個々の教室机を向きあわせるかたちでくつつけてひとつの机にする。そうしてお互いの顔を向きあわせる。といつても、このかたちは終学活になれば自然にする机のかたちであるため、ここからC会議に切り替わつたという意識が特別にうまれるわけではないし、

活発な話し合いになるわけでもない。正直なところ、何度このC会議をやったところでまたCの評価はつくことになるし、その評価の理由も改善方法も固定されている。私語があつたら注意をしよう、給食後の授業は眠くなつて集中力が低下するから気持ちを緩めないようにしよう、週のはじめは忘れものが多くなるから気をつけよう——。特別な中身はないのだ。

私はそんなC会議が好きだったのかもしれない。班での話し合いはほとんどすぐに停滞し、時間だけがぼんやりと過ぎていく。ほかの教室の生徒たちは放課後の部活動へ向かつていく。教室の窓越しにグラウンドや体育館の音が聞こえはじめる。一方、教室ではC会議。宿題としての日記をこつそりと書きはじめたり、手もとのシャープペンシルを分解したりしながら。きょうの部活に顧問の先生は来るのだろうか、きょうの練習メニューはなんだろうと想像して、もう少しつづいてもいいなC会議、と思ったり。そんな時間に日中のような喧騒はなく、窓の外の夕陽は沈んでいく。

それぞれの机の上には何があつたのだろうか、現在の私は当時の私を書いた文字を見返している。毎日の宿題として提出することになつていた日記帳をばらばらとめくり、浮ついた中学生の自分の言葉とそれに対する学級担任の言

葉を追つてみる。この薄汚れた日記帳は、確かに私のその机の上にあつた。隣に座る生徒の机にも。互いの文房具が思いがけず居場所をまちがえたり、わざわざふたつ隣の教室から借りた教科書をその日のうちに返しそびれる時間もそこにはあつただろう。一方、いまの私にC会議はないし、日記帳はもう更新されない。文房具が居場所をまちがえることもなければ、貸し借りする教科書もない。それはさみしいことだけど、このさみしさが忘れていく物事を忘れられないものにしていくと感ずるから、私はこのさみしさを消してしまいたいとは思わない。

私たちは言葉にするだけでは足りない

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

一歩一歩、歩みを進めるたび、新しい発見を重ねていく。その度に、少しずつつかつて居心地の良かった場所が崩れてしまう。私と彼らは違うのだと気づいてしまうから。どこに行けば、つながれるのだろうか。

『つながり』を読んだ。

脳性まひであり、小児科医でもある熊谷、アスペルガーの当事者である綾屋は、それぞれに周囲とのつながりなきを考えながら、違いを越えてつながる方法を探して、当事者研究と出会う。本書によると、「当事者研究」は、自分の身の処し方を専門家や家族に預けるのではなく、仲間の力を借りながら、自分のことをよりよく知るための研究をしているという実践」である。

当事者研究にであった二人は、『つながり』を考えていくこととなる。それぞれが外の世界とつながろうとするとき、外界の細かな違い、つまり「差異」に気付くば

かりでなく、それを語る言葉を整理し、一貫性を持つために構成的体制を築いて、「全体」での統合が必要になっていく。そして、そのような「差異」と「全体」のループが、個人のレベルだけでなく、コミュニティのレベルで必要となることが、『つながり』であると二人は述べる。

「それは言葉にできるから」私たちはつながることに希望を持ち続けるべきなのであろうか。

ドイツ人のジャーナリスト、カロリン・エムケが著した『なぜならそれは言葉にできるから』では、極限状態に置かれた人々が証言する姿について語られている。それはとくにアウシュヴィッツであり、ソ連の強制収容所であり、旧ユーゴスラヴィアでおきた内戦でもある。

強烈な環境に置かれ、日常を失った人々は、『つながり』の作法』で語られるところの「全体」での統合の仕方がわからなくなっている状態とも言える。今まで理解していた構成的体制が突如消え失せてしまった。果たして、自分はそれを言葉にできるのか、言葉にして相手は受け止めることができるのか、と当事者は不安を抱える。

「人間関係の一形式としての他者との会話なしには、我々は自分自身にも世界にも確信を持つことができない。我々

は、自身の経験をひとつの物語にあてはめることを必要としている。(略)つまり、自身の継続的なアイデンティティが証明され、確認され、問われるのは、他者との会話においてなのだ。」

『なぜならそれは言葉にできるから』という希望と意志によって、微かに自らのアイデンティティを取り戻そうとする当事者達。結果、彼らの言葉をどう受け止めるのか、「殴られなかった者たち」や社会の側がどう「聞く」かが重要だとエムケは語る。

生まれた「言葉」はどう聞かれるのだろうか。

『当事者は嘘をつく』で、小松原は、自らの性被害体験から始まったサバイバーに対する研究のあり方を描いている。

当事者であることは「嘘をついているのではないか」という周囲からの疑念、そして自分への疑いと戦いでもあった。そして、彼女自身、「自分は過去の記憶に嘘をついているのではないか」という「語り」に対する不安を持っているという。

一方、小松原は、自助グループの活動をこう振り返る。「誰かの言葉は私のものであり、「私」の言葉は「あな

た」のものだった。もちろん、私という自己は、常に型から溢れ出し、すべてを語ることはできなかった。それでも、少しずつ、私は「私というもの」の形を取り戻し、人前で「私である」ことができるようになった。」

この三冊がそれぞれ描いている当事者は違う境遇だが、それぞれが「語り」の可能性から「つながり」を見る。一方で浮かび上がるのは、「語り」の頼りなさでもある。勝手に受け取られ、勝手に解釈され、歪められることもあるからこそ、語ることができない人も多い。

いかなる境遇でも、私たちは、私たちの人生における「当事者」だ。私はそれぞれの「当事者」論に自分の姿を見出す。それは私がその「型」を求めているからかもしれない。(なぜ求めるのか、私には心当たりはあるが、それを語るのはこの場ではないだろう。)

人間は「語り」「聞く」ことによって、「つながり」を生み、「個」であろうとするのだと希望を抱いている。誰かの物語を生きられて、私であることができるのだから。

世界が変わり始めた二〇二二年二月の私より

あきの素生

(くうねるめがね)



入れられる。最近では、ソース以外の味を選べるようになっていいるお店が多い。「塩」があれば、そちらを選んでみたりもする。外はかりつ、中はとろつ、というプロのわざがうれしい。猫舌なので、かなり慎重に熱を冷まして口に入れる。とろつ、の中のたこをむつむつと噛むと、「ああ、たこ焼き食べてるなあ」としみじみ感じる。たこ焼きにたこを入れることを思いついた方に感謝したい。

旨そうな刺身を見かけた。生だこの刺身だ。うっすら透きとおった身。大きな吸盤。ぶつぶつと切られて、プラスチックのトレイに無造作に入れられている。ラップ越しでも伝わってくる。いかにも新鮮そうな様子だ。

たこが使われている料理は総じて好きだ。つまり、たこが好きなのだと思う。風味もさることながら、あの歯ごたえが自分の好みに合っているのだらう。

たこ焼きには目がない。たこ焼きの屋台があれば、ふらふらと吸い寄せられる。ソースの匂いは大いに食欲をそそり、味も好きだが、味が濃すぎるものが苦手な身としては、ソースは少しつけるくらいがちょうどいい。マヨネーズはたっぷり、かつおぶしはマスト。青のりは、なくても受け

家でたこ焼きを作ることもある。小学生の頃、わが家にフライパン型のたこ焼き器がやってきた。それからは、おやつや休みの日の昼ごはんとして、たこ焼きを焼いた。一回に焼けるのは十二個だったと思う。それを何回焼いただらうか。大抵最初はひっくり返すコツを忘れていて四苦八苦するのだが、数をこなすうちに上達し、タネがなくなる頃には得意満面で、くるりくるりとたこ焼きを丸めていたように思う。でも、タネが少なくなっているためまん丸にはならず、焼きあがるのは鈴カステラを平べったくしたような形のたこ焼きだった。

ひとり暮らしを始めるとき選んだホットプレートは、たこ焼きプレート付きのものだ。食べたいときに、いつでもたこ焼きを食べられるように、と購入を決めたが、あまーり使う機会はない。一度にたくさん焼けるところ、コン

口の前で立ちっぱなしで焼き続ける必要がないところが、新たなたこ焼き器のいいところか。まん丸のたこ焼きを焼きたい、という気持ちがあるので、タネはプレートにめいっばい広げ、格子状に切って、そこからひと区画ずつ窪みにしまい込んでいく。得物は千枚通し。タネが乾ききらないうちにひっくり返し、はみ出すタネを押し込んで、表面が焼けた頃合いを見計って、くるり、くるりとたこ焼きを回す。きれいな球体になったたこ焼きは、千枚通しで少しづついでやるだけで、するする回ってくれるので、必要以上に回し続けてしまう。

家のたこ焼きのタネは、キャベツでかなりかさ増ししている。大阪の方数名とお話したとき、たこ焼きにキャベツは入れない、とその場にいた全員が言われ、驚いた。では、どんな具を入れるのですか、と問うたら、ねぎ、という答えが返ってきた。たしかに、ねぎは入れる。天かすや紅しようがも。で、刻んだキャベツを山盛り入れる。大抵の場合、たこ焼き粉の袋に書いてある個数よりたくさん焼けると思っていたが、それはキャベツのおかげであった。たこ焼きと餃子はいくらあってもいい、と考えている自分にとつては喜ばしいことだ。先日、芽キャベツをグリルで焼いていたら、その香ばしい匂いにたこ焼きを感じた。わが家のたこ焼きは、キャベツ無しには成立しない。

大阪に行ったら、絶対たこ焼きが食べたい、と思っている。以前、所用で大阪に行き、開始までに時間があつたので、近くでたこ焼きを食べようと検索したら、明石焼きのお店がヒットした。そのお店にはたこ焼きもあつたが、せっかくなので明石焼きを頼んだ。ふわふわした食感、卵の味、ひたすお出汁もおいしい。明石焼きにもはまりそうな予感を胸に、たこをむつむつ噛んだ。もちろん帰るまでにたこ焼きも食べた。

久しく各地の旨いものを食べていない。気軽に食べ歩きできる日を持ち望んでいる。



(イラスト・あきの素生)

高いところから「ん」には



ド
ラ
メ
リ
ア

(座敷わらし)

先日、朝のSHRに出た。ショートホームルーム、略してSHR。

普段ならまず起きようのない事態だった。クラスにはそれぞれ担任・副担任がおり、他にも学年団に所属する教員が何人もいる。戦力は十分でまずこちらにお鉢は回ってこない。テストの分散実施の影響で人員が二倍必要なのに、たまたまその朝は雪のため出勤のままならない人が続出し、時節柄たまたま急な休みも重なった。その末の出陣要請だった。

ほぼ耳ちくわ状態で聞き流していた連絡事項を大あわてで書きとめると、軽快な予鈴のメロディに急かされながら階段を上り、目指す教室のドアをガラリ。参考書を一心に読んでいた生徒たちの中で、見覚えのある幾つかの顔が意外そうな表情になる。そうだよね珍しいよね、なんと人生初なんだよ。

「おはようございます」

出欠を取り連絡を伝え終えた時点でまだ二分しか経っていない。他のクラスはまだやっていないようだが、何だ、何

を話せばよいのか。アドリブでちよつといい話ができるはずもなく、隣のクラスを横目にそそくさと教室を後にする。そうか教壇つて随分高いんだなあというのが大きな感想だった。なるほど、着席している生徒たちの様子もよくわかるし、話す自分の姿も見やすいだろう。学生時代よく授業中に内職(というか読書)をしていたが、これは丸見えだったろうかと今更ながら気づく。

同時に、これはわたしの高さではないなとも思う。多くの場合わたしは手渡すひとで、本の森に分け入るための案内人のようなものだ。ひとり対ひとりのそのやり取りには、同じ高さが似合う。



・編集後記……

年に一度のカカオの祭典終わる。売場の華やかな雰囲気を押されて、ついチョコレートを買ってしまい、けれど贈るあてもなく、自分で大事にちびちび食べる……ところまでが毎年のひとつながり。ド
ラ
メ
リ
ア (編集長)

中公文庫、ちくま文庫、河出文庫、角川春樹文庫が本文用紙を2月から共有化。同じ活字でも用紙次第でずいぶん印象が変わります。職人ワザの工夫があったのですね。かつては。

奈良敏行 (発行人)